

論壇

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

日本の株価(日経平均)が34年ぶりに史上最高値を更新した。バブル崩壊と言っても若い人には歴史の話でしかない、実感はないかもしれない。1989年から始まった株価の暴落(バブル崩壊)から34年、日本の株価は低迷を続けていたのだ。

この30年余りの日本経済の状態を、失われた30年と呼ぶ。バブル崩壊からしばらくして金融機関の不良債権問題が深刻化して、多くの金融機関が破綻した。金融危機が一段落しても景気は浮上せず、戦後初めてデフレが経済全体に広がり始める。その後株価は少し回復の基調になったが、2008年のリーマンショック(世界的な金融危機)、そして11年の東日本大震災とショックが続ぎ、株価は再び低迷することになる。

株価最高値 景気拡大の契機に

バブルの時代のピークの1989年には株価(日経平均)は3万8957円であったのが、東日本大震災後には8000円前後と低迷していた。2013年からのアベノミクスの中で株価は上昇を始め、ついに前回のバブルの株価を超えることになる。

株価は変動するものである。この先、反動で株価が下がることもあるだろう。ただ、先週バブルのピーク越えをしたことで、日本経済は新たなステージを迎えていると考えている人が増えている。デフレの時代は終わり、物価と賃金の上昇が続く時代になるという実感が広がっている。

もちろん、物価が上がっていくことは、生活者から見たら好ましいことではない。だから賃金が上がっていくことが必要となる。株価が上昇する背景には企業の業績が改善していることもあり、この業績改善が賃上げにつながっていくことが期待される。賃金とは直接関係のない年金生活者の方々は物価の高騰は大問題だろう。

デフレ経済からの脱却は、悲喜交々、さまざまな影響を私たちにもたらす。単純にその動きを歓迎するわけにはいかないだろうが、それでも企

業業績が向上し、株価が高値をつけ、賃金が増えることで、日本経済の将来に期待できる面も多々あるのだ。

株価は経済の一面を表しているだけであるという見方もある。株価上昇によって恩恵を受けるのは一部の人だけである。企業の業績が上がっても、それによって庶民の生活が大きく向上するわけでもない。株価上昇を冷ややかな目で見ている人も多い。

しかし、たかが株価であれど、されど株価でもある。34年ぶりに株価が史上最高値を更新したことの経済的な意味は非常に大きい。デフレ経済の閉塞感から日本が抜け出しつつあることの象徴的なことでもある。重要なことは、こうした変化が国民の意識や企業行動に反映されていくことにある。経済の景気は気(気持ち)からと言われるが、人々の気が変わっていくことは景気にも大きな影響を及ぼすものである。

日本経済が30年ぶりの大きな潮目の変化の中にあることは間違いない。色々な思いはあるだろうが、ここは素直に株価の史上高値更新をより多くの人が喜び、その気持ちを景気拡大に繋げていきたいものである。